

33 視覚教材を用いた手話通訳事例研究について～実践力の習得と向上のために～

学院手話通訳学科 宮澤典子 木村晴美 野口岳史 市田泰弘

手話通訳者の役割は、ろう者と聴者が主体的にコミュニケーションに参加できる環境を整備することである。そのためには、ろう者と聴者の言語的および文化的バリアをなくすことはもちろん、通訳の目的を効果的に達成するためさまざまな行動をする。これらの行動は無計画なものではなく、通訳利用者が所属するコミュニティにおける倫理、また手話通訳者の職業倫理に基づいた効果的なものでなければならない。しかし、通訳現場は毎回状況（要素）が異なる。利用者が異なり、話題も異なり、物理的条件や心理的条件も異なる。通訳中の要素はあまりにも多様で、一般的な教科書やマニュアルにしたがって行動すればまかなえるようなものではない。常に状況を把握し、展開を予想し、効果的な対応策を考え、判断して実行するという実践力が求められる。その実践力を習得させ向上させるために、事例研究を取り入れている。

従来の事例研究では、通訳場面を記録した文書を読み（または説明を聞き）、通訳場面における問題点を挙げ、その改善策について話し合う方法がとられてきた。しかし、文書では、実際の通訳場面で発生しているノンバーバルな要素（人物の表情や話し方、間合い、雰囲気、視線など）を十分伝えることは難しい。その結果、読み手によってテキストの解釈にゆらぎが発生する。お互いの解釈を確認しないままディスカッションを開始して、途中で意見がすれ違うような事態になることも少なくない。経験豊富な通訳者であれば、自身の通訳体験から場面をリアルに想定することも可能かもしれないが、学生や新人の通訳者は経験値が少なく、テキストのみで場面を把握することは容易ではない。

そこで、手話通訳論の授業における事例検討に、文書による事例研究の問題を克服するため、視覚教材（ビデオ）を導入した。ビデオは通訳場面の全工程（待ち合わせ～打ち合わせ～通訳実施～終了確認～解散）に、よく見られる通訳上の問題を盛り込んである。ビデオは登場人物の行動や雰囲気などをリアルに把握でき、書面による事例提供のような解釈のゆらぎを減少させることができる。授業で初めて事例研究に取り組む段階では、学生が発見できる問題の数は少ない。また、学生が発見する問題点は授業のなかで指摘された項目に拘束されがちである。さらに、問題に至った原因を的確にとらえることも難しい。ビデオは実際の通訳場面と同様にどんどん進んでいく。問題となる通訳者の行動に気づいたとしても、その前に発生していた原因となる要素（場面の状況やセリフ）を見逃していたり記憶していないことが多い。これは、日常的に状況や要素に対して目を向ける習慣がないためと思われる。そこで、ビデオを用いることで同一の通訳場面を繰り返し視聴することができ、学生は通訳現場の文脈や登場人物が表出しているノンバーバルなメッセージなどが、次の通訳行動にどのように作用するのか確認することができる。また、通訳行動が利用者にどのように作用するのかを確認することができる。このような方法で事例研究を続けることで、原因と結果の関係を常に考えるようになり、手話通訳における実践力を身につけ向上させることができた。